

「柳について」

成瀬 司

柳という樹木は、春の雪解け水が勢いよく流れ下る小川のほとりで、白銀色の軟毛が密生した花穂をつけた猫柳もその一種で、猫柳はその可愛らしい花穂の姿に目を引き付けられる。

猫柳は春の訪れとともに真っ先に花を開く樹木の一つで、春告花となっている。日本にはヤナギ属、ハコヤナギ属、オオバヤナギ属、ケショウヤナギ属という4属のヤナギが生育しており、種としては約40種あるといわれている。種間雑種が非常に多く、正確な種を見分けるのは専門家でも相当難しいとされる。

日本に生育している現在の柳は、古い時代に中国から入ってきたものと、わが国に自生しているものに分かれる。中国産の柳は主として枝が垂れる性質をもっていて、シダレヤナギといわれる。このほかロッカドウヤナギ（六角堂柳）やウンリュウヤナギ（雲竜柳）などの変種がある。わが国に自生する柳は、ほとんど垂れず上を向いて伸びる性質をもっている。自生しているヤナギ属には、タチヤナギ（立柳）、ネコヤナギ（猫柳）、カワヤナギ（川柳）、コゴメヤナギ（小米柳）、シロヤナギ（白柳）、ヤマヤナギ（山柳）、オノエヤナギ（尾上柳）、エゾヤナギ（蝦夷柳）、ミヤマヤナギ（深山柳）、オオネコヤナギ（大猫柳）等があり、変種にクロヤナギ（黒柳）、フリソデヤナギ（振袖柳）等がある。

柳のことを熟語で楊柳（ようりゅう）と記されるが、楊（よう）は枝が下に垂れないで上にのびる種であり、柳（りゅう）は枝が下に垂れる種のことを総称している。柳も楊の字も、どちらも「やなぎ」とよむ。

落葉性の樹木で、雌雄異株、葉は単葉で互生であるが、まれにコリヤナギのようにほぼ対生するものもある。花はケショウヤナギ以外は虫媒花であるが、種類によってすこし風媒にかたむいたものもあるといわれる。

ヤナギ属は主に花序の性質と花の構造で、ヤナギ類、オオバヤナギ類、ケショウヤナギ類の三つに分けられる。果実は蒴果（乾果の一つで、複子房の発達した果実で熟すと縦に裂け種子を散布する）で熟すると二つに裂け種子を出す。種子には胚乳がなく、つねに基部に白毛（いわゆる柳絮^{リュウジヨ}）があつて風に乗って散布される。種子はきわめて短命で、適当な場所に落ちないと一週間くらいで発芽力を失う。ヤナギの仲間は極端な陽樹で、日が当たらなくなると弱って枯れてしまう。

・ヤナギの仲間

- ・バッコヤナギ：花序はネコヤナギと較べてまる味を帯びる、ヤマネコヤナギ（山猫柳）の別名もある。ネコヤナギの分布しない道内ではバッコヤナギを「猫柳」と呼ぶことがある。
- ・カワヤナギ：オノエヤナギと似ているが、苞の先がまる味を帯び黒いこと。雄しべの花糸が1本である点が異なる。
- ・オノエヤナギ：10mを超える大木。雄しべの花糸は2本。花盛りの雄花序は黄色っぽく見える。稀に、一つの花序に雄花と雌花が同居する。苞は上半分が暗褐色。
- ・イヌコリヤナギ：葉は先のまるい楕円形で、枝に対生するのがなにより特徴。ときに互生。裂開前の雄しべの葯は赤く、よく目立つ。

・ナチュラル・ヒーリング

アスピリンなどの鎮痛剤の主成分であるサルチル酸は、ヤナギの樹皮に含まれるサリシンという物質から発見されたものです。ヤナギがアスピリンの効力のすべてを備えているわけでありませ

が、ヤナギの樹皮のチンキ剤は、今日でも関節炎や筋骨の痛みの手当てや解熱に使われています。

・実用性の高い保存容器の柳行李

柳行李は通気性がよく、大容量のものが納められ、耐久性も優れていたもので、生活の向上にもなって衣服などの保存容器として実用性が高く評価された。さらに交通手段の発達にもなって人の往来が頻繁になり、縄掛けすれば直ぐにでも運搬用具となり、また落としても壊れにくいこと、蓋の被せ方で収納量が調整できることから、柳行李は運搬性の利点が認められ需要が増大していった。薬屋行李は越中富山の薬屋が置き薬を背負い、得意先をまわるのに使われたことで有名である。間物行李も小間物（化粧品などのこまごましい品物をいう）を行商するために使う行李をいう。帖行李はおもに商家で使われ、商人が大福帳（帳簿）やソロバンを入れ持ち歩いて、仕事に使っていた。行李かばんは、明治14年（1881）に兵庫県豊岡市で生み出されたかばんで、手にさげて使う行李である。軍用行李は、軍隊が荷物の運搬用に使った。柳行李は通気性と吸湿性を兼ね備えていたので、シミや結露を防ぎ、柳に含まれる成分が虫喰いを防ぐこと、丈夫で長持ちすることから、日常的に衣類の整理を保管に多く使われた。柳行李でも、小さなものは弁当箱や旅行用の小物入れなどがあり、多種多様の使い方がなされていた。終戦直後にかけて、食糧不足のためコリ柳の畑は食用畑に代わり、職人の数も減り、安価なプラスチック製品の普及で需要は激減した。

・祝い膳に使う柳箸

柳は食事用具の箸にも作られる。柳箸といい、現在でも新年の雑煮などを食べる時の祝い箸として用いられる。純白で清浄感がある柳箸は正月の雑煮、七草粥、桃の節句、端午の節句、結婚式などに祝い箸として使われ、各地の社寺も吉事や神饌を盛り付けるときは柳箸を使う。柳を箸として使うのは、材質がしなやかで粘り気があって折れにくいというえ、軽くて削りやすいからである。折れにくい柳製の箸を使うのは、箸が折れると不吉だとされるからである。足利七代将軍義勝が落馬して死んだのは、正月に使った箸が折れたことが原因だという言い伝えによるものである。「仏教では、柳は一切樹木の王、仏に供える最高の聖木とされている」

柳は仏に供える最高の木であり、その上にきわめて生命力の強い樹木であり、邪気をはらう霊木であるところから、新しい年の初めを祝う正月三が日の祝い膳の用具として使われる。祝い箸の長さは、末広がりの縁起で八寸（約24cm）が普通である。柳箸の形は丸くて両細のうえ、中ほどが太いので「孕（はら）み箸」といって子孫繁栄を願う気持ちを込めた形であるとの説。

・酒と関わり深い柳樽

柳の材で作られるものに柳樽がある。『広辞苑』は、「胴が長く手のついた朱塗りの酒樽、結婚式などの祝い事に用いる、柄樽または角樽の類」。『日本国語大辞典』は、「柳」は酒のことをいうのだとして「酒を入れた樽の意」だといい、「柳の白木で作り、たがを二つかけた柄付きの平たい酒樽。婚礼などの祝儀に用いる。祝って『家内喜多留』の字を当てることがある」とする。柳樽は店開きや婚礼などに重用され、とくに結納のときには他の縁起物の品々と一緒に贈るしきたりが現在まで続いている。その際に縁起を尊んで柳樽のことを家内喜多留（やなぎだる）と書くのが普通となった。家内喜多留とは、嫁取り、婿取りということによりその家の人が増える祝いであり、それも長く続いて家の内に喜びが多く留まるという意味である。

・柳の木炭は黒色火薬原料

柳の特殊な使いみちに黒色火薬の原料がある。黒色火薬の材料は硝石、硫黄および木炭の三種類を混合したもので、木炭のため色が黒色となることからこう言われる。黒色火薬に使われる木炭は、柳から作られるものが最良とされる。野生の柳の若木（6～7年生）を春先に伐採し、皮を剥いで天日で乾燥し、4～5年蓄えたものを太さ、長さをそろえて、炭焼き窯に入れ、松薪を燃料として木炭にする。良質の木炭は、切断面が紫色の光沢を示す硬い炭である。

戦国時代の動乱がおさまり、平和な江戸時代となった。幕府を除いた各藩のなかで最大の所領をもつ加賀藩（金沢藩ともいう）は、強大な軍事を保有していた。一大名でありながら、幕府がもつ量と同じ火薬量を保有していた。硝石は五箇山（現富山県）で、硫黄は領有していた富山県新川郡立山地獄谷の自噴の硫黄泉から採取されてたという。

・柳の食具・調理具

柳を使った食具や調理具とされる俎板（マタ）がある。柳俎板と呼ばれ、柳の材は色が白く清潔感があることと、毒がないというところから俎板の良材とされた。

・柳枝を歯磨きにする房楊枝

楊柳の材から作られたものに楊枝（ようじ）がある。楊枝は歯の垢を取り除いて、清潔にするために用いられた道具のことで、もとは楊（かわやなぎ）を用いたからこういわれる。

・房楊枝の種類

「柳で作った楊枝を使うと歯が疼かない」という伝承がある。京都の三十三間堂は柳の棟木の伝説で知られているが、ここでは「楊枝浄水加持会」といわれる「柳の加持」が行われている。ここでの楊枝は、歯の掃除をする房楊枝ではなくて、本物の柳の枝のことである。柳の枝（つまり楊枝）をさした浄水を信徒の頭上にそそぎ、頭痛を軽減あるいは消失させるとともに、無病息災、悪病除去を願うものである。お寺で渡される頭痛お守りにも柳が入っているという。

・文部省唱歌「螢」

1・螢のやどは川ばた楊、楊おぼろに夕やみ寄せて、川の目高が夢見る頃は、ほ、ほ、ほたるが灯をとます。

2・川風そよぐ、楊もそよぐ、そよぐ楊に螢がゆれて、山の三日月隠れる頃は、ほ、ほ、ほたるが飛んで出る。

「螢」では川端楊となっており、川べりに生えるカワヤナギを指しているが、幼い時、子供たち同士で、あるいは父や兄に連れられ出かけた螢狩りなど、忘れ難い印象の樹木とし柳が唄われている。

柳は常に水でじめじめした土地でも築の尾根のような乾燥したとちでも強い生命力をみせるが、いつも根を踏まれる所や大気汚染に対する抵抗力は弱い。我が国の街路樹の歴史とともに、しきりに植えられた樹種であるが、大都市の街路樹としてあまり適さなくなっている。今後は川べりの道路など、楊の生育に適した場所で、独特の樹形を生かした風情ある景観をつくり出すことに利用されていくことが望まれる。

《参考とした図書など》

「森のさんぽ図鑑」 著者：長谷川哲夫 築地書館

「木々の恵み」 著者：フレッド・ハーゲネーダー（玉置悟 訳） 毎日新聞社

「柳」 著者：有岡利幸 法制大学出版局